

学会企画シンポジウム

心理学実験・実習科目における行動分析学テーマ

Behavior Analysis Activities in Laboratory Courses of Psychology Departments

司会： 浅野俊夫（愛知大学文学部）Toshio Asano (Aichi University)

話題提供：中鹿直樹（立命館大学）Naoki Nakashika (Ritsumeikan University), 石井拓（慶應義塾大学心の統合的研究センター）Taku Ishii (Centre for Integrated Research on the Mind, Keio University), 山口哲生（大阪市立大学文学部）Yamaguchi, Tetsuo (Osaka City University)

日本心理学会の認定心理士申請資格の必修科目とされ、名実ともに心理学科生としてのアイデンティティを醸成する場である、心理学実験実習において、行動分析学関連の課題はどのように扱われているであろうか。3つの大学の事例を紹介していただき、出来るだけ多くの大学で行動分析学のテーマが組み込まれるようにするにはどうしたらよいかを議論したい。

立命館大学での行動分析学に関する実験実習について（中鹿）立命館大学文学部心理学専攻では、2回生時に基礎実験実習、3回生時に特殊実験実習の履修が割り当てられている。基礎実験実習では専攻の学生全員が1年間で10テーマの実習を受ける。2006年度の場合、10テーマのうち1つが行動分析のテーマ（ハトのオペラント条件づけ）である。特殊実験実習では4領域（14テーマ）の中から前期・後期に1つずつの領域を選択する。今年度は2人の専任教員が行動分析のテーマ（ハトとヒト）を担当している。本シンポジウムでは、発表者が担当した、基礎実験実習のテーマ「ハトのオペラント条件づけ」について詳しく紹介する。また3回生のテーマ（ハトのスケジュールパフォーマンス・ヒトのボールキャッチ行動のシェイピング）についても映像をまじえながら紹介する。

「心理学初等実験」における行動分析学テーマ（石井）慶應義塾大学では文学部心理学専攻3年生の必修科目「心理学初等実験」の一部として行動分析学に関係する実験、実習が行われている。この科目は毎週1回（180分）ごとに異なるテーマを取り上げる方式をとっているが、行動分析学に関するものとしては従来から「自動反応形成」、「行動観察」、「ヒト

の選択行動」の3つがある。これら各テーマでは、シェイピングの技法、行動記録法、行動データの時系列解析法、単一被験体法などが学ばれている。また、他のテーマとして2005年から新たに「行動実験」と「自由課題」が加わった。前者ではMED-PDシステムを使った動物実験の実施方法が学ばれており、後者ではヒトにおける遅延割引を基本テーマとした上で学生たちが実験計画を立て、それに沿って実験が行われている。発表では以上について詳しく紹介し、短い時間で効果的な実験、実習をするためにはどうすべきか、会員諸賢のご意見を仰ぎたい。

ヒトにおける理想自由分布理論の実験的検討（山口）野生の動物集団は、いくつかの餌場が同時に存在する時、それらの餌場をどのように選択するのだろうか？また、スーパーの買い物客は、混雑したレジの間でどのように並ぶのだろうか？このように、複数の選択肢間で個体がどのように分布するかという問題は、理想自由分布理論（the ideal free distribution theory）を用いて説明することができる。

本報では、行動分析学の基礎研究分野において主要な研究テーマである選択行動の問題を、限られた実験実習の時間内で扱うことのできるヒトにおける理想自由分布理論の実験を紹介する。この実験実習のねらいは、①2つの餌場（赤と赤のカード）に分布する被験者の割合が、それらの餌場に割り振られた得点の割合と一致するか否かを検討し、②被験者の分布の規則性を明らかにする。③実際に得られたデータに、ベキ関数を当てはめることで数理モデルの有用性を学習する。